

大いなるスタイルの医学 アルベルト・フレンケルの科学と臨床

石井 誠士¹⁾

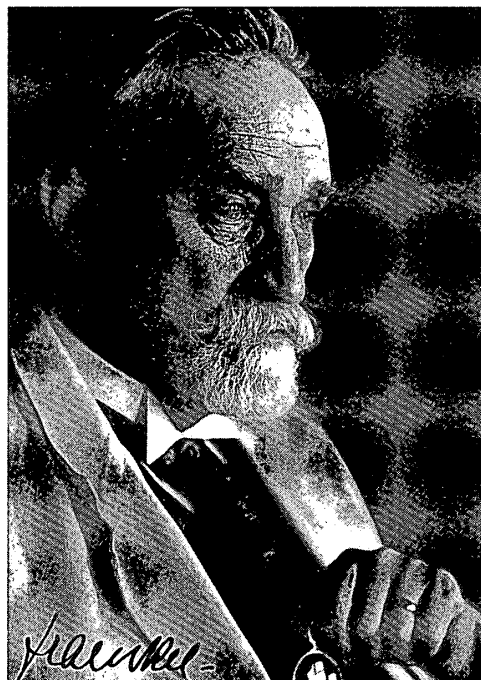
要 旨

ドイツの医師アルベルト・フレンケルは、1900年頃ストロファンティン静脈注射治療を創始した人として有名である。ハイデルベルクとバーデンヴァイラーの2つの町に病院を開設したことや若い優秀な医師や看護師を養成したことも大きな功績である。

しかし、人々が彼において特に期待したものは、むしろ、彼の患者を受け容れる仕方、姿勢であった。善良さ、患者の訴えにひたすら耳傾ける姿勢、患者への自己の絶対的な依存性、今日、医師と患者の間のパートナーシップ関係について言われる受動的非対称性passive Asymmetrieこそが、フレンケルの医学の第1の特徴をなしている。

だが、強調しなければならないことは、フレンケルが、ヴァイツゼッカーと同様に、病気への自然科学的なアプローチを軽んずるところか、むしろ重視したことである。自然科学的研究と臨床、内在と超越とが、彼の場合には、一つに結びついている。ここにこそフレンケルの「大いなるスタイルの医学」の秘密があり、またその今日性がある。

キーワード：フレンケル、科学、臨床、パートナーシップ、受動的非対称性



1) 兵庫県立大学看護学部 専門関連科目哲学系

アルベルト・フレンケル Albert Fraenkel (1864–1938) については、日本ではほとんど知られていない。ドイツでも今日のごく限られた人だけが折に触れて彼のことを思い起こすに過ぎない。

しかし、この、20世紀の前半にハイデルベルクで活動した医師は、例えばアルベルト・シュヴァイツァーやヴィクトール・フォン・ヴァイツゼッカーといった人たちが医学を志したときに大きな励ましを得たし、カール・ヤスパースやヘルマン・ヘッセのような思想家や作家が医師の模範と仰いだことを思うと、今日の医学の在り方と課題とを根本的に批判的に考えるためにも、なお一顧がなされるべき意義をもっていると言わねばならない。

1. 生涯

彼の生涯については、長く助手をしていた薬理学者ヴォルフガング・ホイプナー (1877–1957) の叙述に詳しい。それによると、アルベルト・フレンケルは、1864年6月3日に、ドイツのラインファルツ州ムスバッハ市のワイン商の家に生まれた。すぐ隣の町ノイシュタットの学校とランダウのギムナージウムで学んだが、既にこの頃、彼は医学の道に進む決心をしていたと言われる。

1883年春に医学を学ぶためにミュンヘン大学に進んだ。そこで彼はまず動物学と生理学に興味をもった。教養課程Physikumの試験合格後、ヴェルツブルクの砲兵隊で半年間の兵役をすませてから、シュトラスブルクで臨床医学を学んだ。この大学には、当時多くの優れた医学者が教えていたが、学習意欲旺盛なフレンケルに特に強い印象を与えたのはアドルフ・クスマウルとフリードリヒ・フォン・レックリングハウゼンであった。1888年にシュトラスブルクで国家試験に合格し、パイロイトで残り半年の兵役を終えたあと、ミュンヘンの婦人科病院で訓練した。

ところが、この希望に燃えた時代に、彼は重い

運命の打撃を受けることになる。彼は肺結核に罹ったのである。彼は深い絶望に陥ったが、同時に、自らの病いの体験が患者のこころへの共感にとって重要であることをはっきりと悟得したように思われる。彼は転地などの療養に専念して、病いを克服する。1890年夏に、彼はチューリヒで医師の卒後教育を受け、次の冬にはローベルト・コッホの結核の学説に期待を抱いてベルリンに赴き、結核の医師にして研究者であるゲオルク・コルネの助手になった。しかし、この期待は尚早であることが解って、多くの医師と患者が抑うつ状態に陥る間に、フレンケルも計画を断念せざるを得なかった。

彼は当時まだ余り知られていなかったシュヴァルツヴァルトの保養地バーデンヴァイラーに住んで、一介の村の医師としての活動を始めた。そこで彼は夏の間に保養客の診療をし、冬期を学問的研究に当てるという生活の時間配分をした。彼はひたすら人を助けるという医師の使命に貫かれた生活をして、一旦患者と対座し、あるいは道の途中で患者に出会ったときは、いつも時間を惜しまず体や心のあらゆる悩みや不安の訴えに耳を傾け、しばしば懺悔の告解師の役割をもした。そのようにして、この、地方の小さな保養地が医師としての彼の形成のための理想的な場所となった。

フレンケルについて多くの人が讃歎したのは、彼の、あらゆる患者一人一人の感性や関心領域に対応する驚くべき共感能力である。田舎の農婦や地元の皮革商人からワインの大地主やベルリンの大学教授夫人に至るまで、彼は全く分け隔てなく患者に接した。どんな人にでもすぐ共感して、身体的な苦しみの背後のどこに精神的な苦しみが隠れているかを澄みきったまなざしで、ごく目立たない仕方で見抜いた。

フレンケルの医学は、そのように、苦しむ人の中核に向かうものであったが、その際、彼は、自然科学的な研究やその成果の応用を重視した。すなわち、患者の身体面について、厳格に良心的な観察と検査、および熟考し慎重に遂行される処置

を行った。当然のことながら、彼に患者を紹介した医師たちと手紙による意見交換を怠らなかった。

バーデンヴァイラーに、彼は、治療を充実させるために、患者の関心および社会的視点に基づいて、2つの専門病棟を建てた。食餌療法のためのヴィラ・ヘトヴィヒと肺疾患患者のためのヴィラ・パウルとである。

この当時、彼の診療を受けるために、バーデンヴァイラーに来て、フレンケルと出会い、ヴィラ・ヘトヴィヒで療養の日々を過ごした人々の中に小説家のヘルマン・ヘッセ（1877-1962）がある。彼は、たくさんの結核や心臓病の患者が、ヨーロッパ各地から、遠くはポーランドやロシアからも、3等列車で、ドイツ語ができない人は「バーデンヴァイラー、フレンケル博士」とか「バーデンヴァイラー、ヴィラ・パウル」などと書いたプラカードを首からぶら下げて、やって来ていたことを伝えている。

彼の名声を慕って訪れる患者の中には、国際的な高名な自然科学者もいた。学問的な優越感があるために治療行為が難しくなるそういういわゆる問題的な患者にも、このドイツの一地方医師は、臆せず、医学的な議論をするよりも、むしろ彼の治療処置を貫徹するかたちで対応した。

彼は、早くから薬理学に関心をもった。薬物治療において、彼は決して、与えられた技術を良心的かつ正確に実施するだけでは満足しなかった。1893/94年の冬に、彼は薬の効果の本質の検証に着手して、ハイデルベルク大学の薬理学研究所に通い始めた。彼の研究でよく知られた成果は、ウサギの呼吸中枢に対するコデインの作用をモルヒネのそれと比較した研究である。しかし、彼の実践的経験に重要な意義をもったのは、医療における、ディギタリス配糖体の分野の理論的認識の進歩の応用であった。彼は、ディギタリスの葉とそこから抽出される薬物の価値規定と調剤の問題、その血圧への作用、いわゆる「蓄積」の問題と取り組んで、1902年から1908年の間に多くの論文を

発表した。

だが、医学史における彼の名前を不朽の榮譽あるものにする貢献は、心疾患の治療へのストロファンティン静脈注射の導入（1906年）である。この強心剤の試験は1905/06年に、当時ルードルフ・フォン・クレール（1861-1937）の助手をしていたゲオルゲ・シュヴァルツと共同して、シュトラスブルク大学病院で行われた。以後フレンケル自身によって基礎づけと改善がなされ、多くの医師たちが学ぶことになるこの方法によりいのちを救われた人は数知れない。

彼は世界的に有名な医師にして最も尊敬された研究者になり、その結果、1914年には、「教授」の称号を与えられた。家庭的にも、1896年に結婚した北ドイツ・オルデンブルク市出身のエルナ・トラーデとの間に2人の娘を恵まれて、幸せであった。

1914年8月の戦争勃発とともに、フレンケルはバーデンヴァイラーの牧歌的な生活を後にしてハイデルベルクの野戦病院に配属され、その医長と第14師団顧問内科医の任務に就いた。この任務を、彼は軍隊と祖国に対し、また個々人に対しても、強い責任感をもって遂行した。しかも、彼は常に彼の本領ともいえるべき、様々な悩みをもった兵士たちのコンサルタントの役を担っていた。

戦争終結とともにフレンケルは再び彼の医学の本来の計画に戻って、既にバーデンヴァイラーで小規模かつ私的に達成していたことが、戦後の切迫した状況においてこそ重要であることを確認する。敗戦と革命の後であるから、計画を遂行するには実にさまざまな困難があったが、彼は奔走してハイデルベルク郊外のロールバッハに結核患者のための病院を、同時にケーニヒシュトゥールの西の、森に囲まれたシュパイヤーエアホーフに市民療養所を建設することに成功した。

結核は、当時は、国民の健康にたずさわる人たちの重要課題であったが、フレンケルにとっても、ストロファンティンと並ぶ生涯の関心事であり、彼は、北バーデンの結核患者療養施設を作って、

それをハイデルベルクの大学病院での医学教育や看護教育とも密接な関係にもたすことに成功した。シュパイヤーホーフの教育コースは高い学問的水準に達し、重要な問題に関する小さな学術会議の性格をもった。例えば、慢性疾患の開始の最初の兆候のような独創的な問題が、ここで既に議論されていた。

1928年にフレンケルは、嘱託教授 Honorarprofessor として、ハイデルベルク大学の結核のための教育を委託された。彼は将来の医師たちのために、この病気についての彼の知識と見解、さらに医療的問題と社会的意義とについて講義し、公衆衛生や国民経済の教授たちとの共同研究を行った。

1933年春、ナチスが政権を掌握した。ユダヤ人であったフレンケルは、彼自身が建てた2つの病院と大学の地位を奪われることになる。これまで築いてきた彼のこれまでの医療と研究の活動が、一切、偏狭な民族政治により解消され、不可能にされたのである。多くの友人が去って行ったが、彼はドイツにとどまり、バーデン・バーデンの近くに引っ込んで過ごした。

彼はなぜドイツにとどまったのか。それはまず、彼がプロテスタントのキリスト者として、彼の患者を捨てることができなかったからであるにちがいない。しかしまた、ハイデルベルクの多くのユダヤ人の亡命を援助して、のちにイスラエル政府から表彰を受けたプロテスタント牧師ヘルマン・マース Hermann Maas (1877-1970) の支援も大きかったであろう。1934年6月3日には、シュヴァルツヴァルトのホルニスグリンデ中腹のザスバッハヴァルデンに、彼の最も近い親戚とごく少数の友人たちが集まって、彼の70歳の誕生日を祝った。彼の患者であった哲学者カール・ヤスパース (1883-1969) は、彼に感謝と祝福の書簡を書き送っている。

公職を追放されたものの、フレンケルは決して活動をやめたのではなく、1935年ケンブリッジ、さらに38年オックスフォードで開催された薬理学

の大会に出席しているし、36年にはバーゼルの医師会に、37年にはコルマールのパストゥール病院の落成式に、38年にはミラノにも招かれて、講演をしている。治療行為も、私的に、さらにオランダやスイスにも招かれて、行っている。ホイブナーは、当時の彼には、彼の叡智と落ち着きと深慮とから生まれた内面的な暖かさがあったことを伝えている。

アルベルト・フレンケルは、1938年12月22日にハイデルベルクで死去した。その前の月に大規模なユダヤ人迫害運動が起こって、ドイツ中のシナゴーグが焼かれた。彼は共同墓地ベルクフリートホーフに葬られ、マース牧師が追悼の言葉を述べた。娘婿ハンス・アンシュッツは、墓が冒涇されることを懸念して、アンシュッツ家の墓地に埋葬することを希望したが、市は拒否した。これはナチス政権崩壊後によりやく実現する。墓碑には、「アルベルト・フレンケル、医師」とのみ記されている。記念胸像が、2004年10月に、彼が建てたロールバッハの病院、現在の「トーラックス病院」Thorax-Klinikの中庭に建てられた。

2. 医学

医学史においては、フレンケルは1900年頃ストロファンティン静脈注射治療を創始した人として有名である。ハイデルベルクとバーデンウーアイラーの2つの町に療養所を創立したことや若い優秀な医師たちを養成したことも大きな功績である。

そういう薬理学的研究と病院建設と医学教育は確かに彼の業績として重要であるが、人々が彼において特に期待したものは、それらではなかった。人々は、彼の患者を受け容れる仕方、姿勢を信頼した。

小説家ヘルマン・ヘッセが彼に「大いなるスタイルの医師」Arzt großen Stilsを見たのは、まずこの華奢な、若い頃結核により弱くなり、非常に用心深く生きるようになった人の「活動力」

Arbeitskraftにおいてであった。彼はこの「超人的な、日々に更新するエネルギーの常動体 Perpetuum mobile」がどうして可能なのか熟慮した。フレンケルは、12時間あるいはそれ以上の集中的な活動の後、夕方にはクタクタに憔悴してベッドに横たわった。しかし、翌朝には早い時刻にもう彼を待っている助手や患者のところに駆けつけた。その際、ヘッセがいちばん驚いたのは、フレンケルの精神的な開放性 *seelische Offenheit*、「その日その時に彼の目や耳に入ってくるあらゆるもの、同僚や看護師の報告や質問に対し、あるいは患者たち、その中には賢い人もいれば愚かな人もいるし、おしゃべりの人もいれば寡黙な人もいるし、短気な人もいれば忍耐強い人もいる、そういうあらゆる人々の愁訴や苦しみ」の物語に対し、無制限に、一見すると全く受動的に見える開かれた姿勢を取っていた」ということである。哲学者カール・ヤスパースも、フレンケルの、世界のあらゆる出来事に臨機応変に対応する「早変わり能力」 *Verwandlungsfähigkeit* に注目し、それは、「惜しみなく与える善良さ、こころの根源的な力」に発する、と語っている。この善良さ、患者の訴えにひたすら耳傾ける姿勢、患者への自己の絶対的な依存性、今日、医師と患者の間のパートナーシップ関係について言われる受動的非対称性 *passive Asymmetrie*こそが、フレンケルの医学、否むしろ彼の医師存在の第1の特徴をなしている。

ホイブナーは、フレンケルが一旦対座し、あるいは道の途中で出会った患者と、いつも時の経つのも忘れて体や心のあらゆる悩みや不安の訴えに耳を傾けたことを伝えている。しかも患者の訴えはしばしば懺悔にもなったと言われる。彼は、1896年にプロテスタントに改宗したが、神学を医学よりも高い学問と見ていたことから、彼に、宗教的な生き方をすることが重要関心であったことが解る。おそらく、彼がそのように患者に対し無条件に開かれた姿勢を取ることができるようになったのには、彼自身が、青年時に、当時不治の

病気であった結核を病んだことが深く関係しているにちがいない。人は自ら深く病み、死を経験して、罪責意識をもつようになることによってのみ、あらゆる他者の苦しみを自己自身の中に経験するようになるようである。

近代の自然科学的医学の時代に、これは「純粹な奇蹟」でもあるであろう。自己と他者との間の受動的非対称性、他者への自己の絶対的依存性ということは、いわゆる対話とは相容れないように思われるかもしれない。他者の声にひたすら耳傾けるということは、他者に対して自己というものが無くなる、自己が無になることを意味している。しかしながら、真実には、他者へのこのような絶対的な依存性、他者本位性こそが、自己が真に自己自身になることを可能にすると同時に、自己と他者との対話、自己自身の中に他者を見、他者において自己自身を見出す相互性ということをも、初めて現実化する、とすることができる。

若きヴィクトール・フォン・ヴァイツゼッカー (1886-1957) がフレンケルにおいて見たものも、まさに患者との彼のこの関わり合いの仕方であった。1918年夏に、フレンケルが、「血沈は、結核患者の診断の際に、重要な予後手段である」と語ったとき、ヴァイツゼッカーは、そこになお「内科学」における思惟方法の「外面性」を見た。しかし、彼は、この医師の、一人の胆嚢を患っている若い兵士への「戯れるように感知する対処」 *spielend-fühlendes Eingehen* の仕方に目を見張った。フレンケルは、「腹壁をやさしく触診したあと、気付かれない仕方で痛みの具合を問い、職業上の願望や個人的な問題に移って行って、それ以前には全く無縁だった人の感情移入的直観へと到った」と彼は書いている。彼は、フレンケルを彼の師クレールと比較して、クレールが「自分の存在を患者の中に投影し、患者を医師としての自分の基準で計った」のに対し、フレンケルは「患者の存在を受容し、一切計って評価するようなことはせず、一つの全体像として受け容れた」と捉えている。そして、「それ故、私の中にも他者の存

在を受け容れたいという憧憬が生きていたのであり、この出来事から私は治療の正しい形式の発見を期待したのである」とも述べている。間人間的あるいは間主体的プロセスこそ治療の本来の核をなすということを、ヴァイツゼッカーは、アルフレート・フレンケルの臨床態度において確認することができたのである。彼によれば、この医療的態度は、キリスト教の中に目覚めた内面性に由来するのであり、それは、愛にほかならないが、その本質は、「自己を自己自身の中にでなく、汝の中に経験する」"das Ich im Du, nicht in sich selbst erfahren"ことにあるのである。「自己を汝の中に経験する」、どこまでも向こうのものがこちらになるということは、それ自体、時間の中で起こり、持続し、「時熟」zeitigenする、自己の不断の根本的転換の出来事そのものを意味している。感官および心の接触によって、私たちは、却って感官でも心でも触れえない苦しむ汝そのものに至る、否むしろ、その超越的な苦しむ汝において自己を見る。「生きているものを探究するためには、生命に関与せねばならない。・・・生命を我々は自身生きているものとして見出す」のである。

しかし、強調しなければならないことは、フレンケルが、ヴァイツゼッカーと同様に、病気への自然科学的なアプローチを軽んずるところか、重

視したということである。ランバレーネのアルベルト・シュヴァイツァー（1875-1965）との往復書簡も、オゴウェ地域に自生しているストロファントウスの毒性と薬効を話題にしている。ただ、彼はフロイトの精神分析の理論と方法を取り入れなかった。彼の場合、どこまでも身体を対象化して追求することにおいて、それに即して、こころ、主体が覚醒するのである。自然科学的研究と臨床、すなわち内在と超越とが、彼の場合には、一つに結びついている。ここにこそフレンケルの「大いなるスタイルの医学」の秘密があり、その今日性がある。彼は、血沈に、結核の経過結末を予知するための重要な手段を認めた。だが、それは、決して生命を単に生物学的対象として見ることを意味しない。むしろ、それは、生物学的に把握される外的現象に内的生命の象徴を見るということであるはずである。それ故、彼は、「治療行為は唯一しかない。それは薬理学的な原則に基づき、薬理学的な批判に耐える治療であって、これこそ公共の財となるべきものである。」とさえ言っている。彼の最後の、ミラノでの講演を、彼は、彼が師と仰いだベルンハルト・ナウニン（1839-1925）の「医学は科学にならなければならない。さもなくば医学は無に等しい。」の語をもって終えている。

参 考 文 献

1. *Albert Fraenkel - Arzt und Forscher* - , Gedenkensgabe anlässlich des 25. Todestages von Albert Fraenkel(22. 12. 1963), zusammengestellt von Dr. Georg Weiss, Poell, 1963.
この中に、次の文章が含まれる。
Fraenkel, Albert: Zur Digitalistherapie. Über intravenöse Strophanthintherapie(1906).
Heubner, Wolfgang: Albert Fraenkel.
Jaspers, Karl: Brief an Albert Fraenkel(1934).
Weiss, Georg und Hatzig, H.O.: Albert Fraenkels letzte Lebensjahre.
"Damit ist der Ring geschlossen" ein Briefwechsel mit Albert Schweitzer(1937/38).
Hesse, Hermann: Aufzeichnungen eines Herrn im Sanatorium(1947).
Hesse, Hermann: Ein Arzt grossen Stils.(1947).
2. Weizsäcker, Viktor von: *Natur und Geist*(1944), GS, Bd. 1, 48 u. 50.
3. Schipperges, Heinrich: *Ärzte in Heidelberg. Eine Chronik vom "Homo Heidelbergensis" bis zur "Medizin in Bewegung"*, Edition Braus, 1995, 221-222.
4. *Leben für Versöhnung. Hermann Maas. Wegbereiter des christlich-jüdischen Dialoges*, hrsg. von Werner Keller, Albrecht Lohrbacher, Eckhart Marggraf, Claudia Pepperl, Jörg Thierfelder und Karsten Weber. Hans Thoma Verlag, 1997.
5. <http://www.m-ww.de/persolichkeiten/fraenkel-a.html>
6. <http://www.albert-fraenkel.de/>
7. <http://home.t-online.de/home/hansjoachimr/personf.htm>

The Medicine in Great Style On Science and Clinic of Albert Fraenkel

Seishi ISHII

Abstract

Albert Fraenkel(1864-1938) was a German physician who worked in the first half of the 20th century in Heidelberg. He is known as the man Albert Schweitzer and Viktor von Weizsäcker or Karl Jaspers and Herman Hesse esteemed as a model of their medical doctor.

In medicine he studied especially in the sphere of pharmacology and developed the using of digitalis-glykoside in heart disease therapy in the beginning of the 20th Century. He founded hospitals both in Badenweiler and in the suburbs of Heidelberg and educated young physicians and nurses there.

But it was his way to accept the patients that people expected of him, and he indulged them by listening to their complaints. This is the passive asymmetry which is today regarded as the concept which characterizes the partnership-relationship between physician and patient. And yet we must not miss that he, like Viktor von Weizsäcker, valued highly the scientific approach to illness. Doing justice to both Natural scientific researching and clinic, that is immanence and transcendence are one in all. Here we find the secret of his medicine in great style and its modernity.

Key Words: Fraenkel; Science; Clinic; Partnership; Passive Asymmetry